



環境省事務次官 和田篤也氏

担当課広報広聴課

# 新春対談

## 環境とまちと人



市長 米沢 則寿

### 育ったまち帯広



**市長** まず、帯広に住んでいた時の印象や思い出す風景などを、お聞かせいただけますか。

**和田** 私は室蘭で生まれ、その後、隣まちの登別に引っ越し、中学2年生まで過ごしました。室蘭は、「工業都市」としての印象が強いまちだったため、父親の転勤に伴い、日高山脈を越えて、十勝平野のど真ん中にある帯広に来た時は、北海道らしい自然豊かなまちだと感じました。

特に、転校した南町中学校の校舎からは、日高山脈が真正面に見える風景は、登別ではあまり見られる景色ではなかったのが驚きました。それと、登別の中学校は、マンモス校だったので、転校生は馴染みにくいような雰囲気もあり

ましたが、帯広に転校してみると、小学校の時からずっと友達のような感じで接してくれて、とても嬉しかったですね。

**市長** 進学した柏葉高校も同じで「よそ者」という言葉が本当にない気さくな地域だなと思いました。

**和田** なるほど。「十勝モノロー主義」を閉鎖的な地域の代名詞のように言われることもありましたが、もともと、外の地域から入植してきた歴史があるからなのか、そんなことは全くないように思います。

**和田** なかったですね。転校した初日から、給食を一緒に食べて、プロレスをやるぞとか(笑)。「いきなり!?俺、今日転校してきたばかりだけど…」と。

**市長** 開放的なんだな。(笑)  
**和田** そうですね、開放的というイメージと合っているかもしれないですね。そして、当たり前だと思ってい

た食べ物の味が、帯広では違いました。特に給食で驚いたのは「牛乳がおいしい」こと。濃い味がしましたね。

**市長** 道内で転校しても、そう思われなかったか。十勝・帯広は、素材の良さに触れられる地域ですね。

**和田** そう思いました。東京に来た時に、牛乳だけではなく、野菜からお肉、お魚まで、いろいろな食べ物、よほど良いお値段を払わないと、おいしいものがない。当たり前だと思っていた食の文化が、当たり前ではないことに気が付きました。

**市長** 私も東京に長く住んでいましたが、確かに東京には何でもあれるけれど、「お金を出せば」という条件がつくことを、今のお話を伺い、改めて感じました。

### 自然はあらゆる活動の基盤



**市長** やはり帯広は、お話しただいたように、空間の広さ、自然、みどり、そして、食という印象です。

**和田** この地域の財産は、まずもって自然豊かなことです。なぜかと言うと、人間のあらゆる活動の基盤は自然だからです。

次に「食」のブランド。「フードバレーとかち」は、一見、ビジネス風に聞こえますが、生活の基本、衣食住の「食」ですよ。実は、市民の目線、暮らし目線での政策なんだと思えます。

**市長** 十勝・帯広の先人たちは、「食と農」と、その背景にある「自然」との接点をベースに生きてこられたのではないかと思っています。それで、産業政策として「フード

バレーとかち」を始めたいです。

**和田** 自然と食に加え、もう一つの財産は、エネルギーではないかと思うんです。十勝はエネルギーの視点からも、卓越した資産を持つているのではないのでしょうか。

**市長** はい。「フードバレーとかち」に取り組む過程で、10年ほど前に気が付いたのが、食と農の延長で、再生可能エネルギーの「バイオマス」にも取り組むことの有用性です。

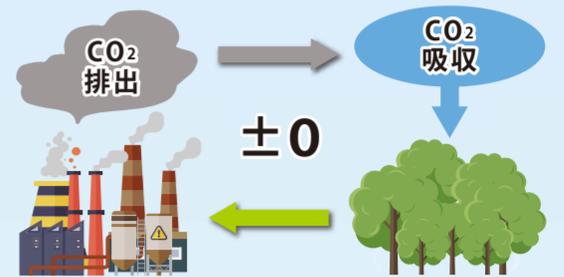
地方都市の弱みは、エネルギーを地域外から買っていることです。地域循環型の経済について考えていた時に、それまで廃棄物として扱われていた家畜のふん尿を電気や熱のエネルギーにすることで、負の遺産だった家畜のふん尿がプラスになるかもしれないと、逆転の発想につながりました。

**和田** 今までエネルギーは国の政策であり、地方とは無関係の世界のように思われていましたが、カーボンニュートラル(右下参照)につながる、再生可能エネルギーは、地域の防災対策やビジネスにも広がる可能性があります。

カーボンニュートラルは、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を減らしていくことだけが目的ではなく、実は一番エッジが効いている「地方創生」、まちづくりの手段になるのではないかと思っています。

## カーボンニュートラルとは

温室効果ガスの排出そのものをなくすという意味ではなく、人々の活動に伴う温室効果ガスの排出量から、森林などによる温室効果ガスの吸収量を差し引いたものをゼロにすることです。



## カーボンニュートラルの取り組み

温暖化の影響を抑えるため、日本は2050年までにカーボンニュートラルにより全体として温室効果ガス排出ゼロを目指すことを表明しています。



**市長** 脱炭素社会は、地球を守るために「我慢する」ことが目的ではなく、多少の不自由さを受け入れることで新しい価値を創っていくものだと思います。決してやせ我慢ではなく、我々の生活を豊かにしていく新しいものに結び付くのだと理解できれば、市民の皆さんにとって、環境保全と地域の暮らしとのつながりが、もっと身近になるのではないのでしょうか。

**和田** そうですね。困窮を強いることは政策として成り立ちません。

**市長** 食や農を中心にしたまちづくりをしていけば、環境との接点は確実に見えてくる。ここで生活して、営みを続けていくことで、将来世代と環境のために役に立てると思うと、自分たちのプライドも刺激されると思います。将来に向かつて、夢や希望を持てる地域というものは、どんな時代にあっても、時代遅れにはならないのではないのでしょうか。

### 気候変動時代のまちの姿



**和田** 「私たちの未来は温暖化地

獄です」ではなく、気候変動時代にあっても、実は生き生きとした営みが成り立つ。もつとと言うと、気候変動時代に即したビジネスを創り上げようという雰囲気や、やっとならざるようになっていくように思っています。

**市長** 確かに、気候変動のコントロールはできないですが、品種改良の効果もあつて、十勝や北海道の農作物の収量は上がっています。また、同じ畑で何年も同じ作物を作っていたら、「連作障害」といつて生産性が下がってしまうため、十勝では、毎年、畑ごとに4・5種類の作物を回して作ります。それを「輪作って言うんだぞ」と、農家の方に教えられたことがありましたが、金融の世界で働いていた私は、畑の中で「リスクマネジメント」をしているのだと理解しました。資金を運用するには、いくつかの金融商品を組み合わせ、損失のリスクを低減しようとしていますが、この土地の人たちには、農業という仕事を通して、生きていく上でのリスクマネジメントの知恵が備わっているのだと感じまし

# 日高山脈襟裳国定公園って？

## 日高山脈の魅力は？

手つかずの自然が残る原始性が高いところです。世界的にまれな地質を有し、氷河がつくった地形やここでしか見られない多くの動植物が存在しています。

## 国立公園になると何か変わるの？

日本を代表する「傑出した自然の風景地」として、環境大臣が指定し環境省が管理することになります。そのため、国内はもとより世界にも、十勝・日高が知られるきっかけになります。

## 市はどんな活用を考えているの？

日高山脈を地域資源として活用することで、景観を楽しむだけでなく、登山やキャンプ、釣りといった自然体験に、国立公園化という付加価値を加えたアウトドア観光として魅力向上が期待できます。



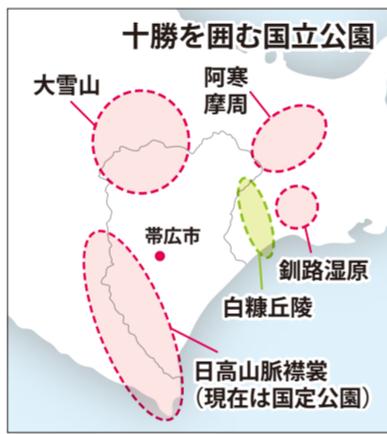
た。  
**和田** 面白い！気候変動の中で被るマイナスのインパクトを、ネガティブに考えて「俺たちのまちはもうだめだ」ではなくて、むしろ気候変動時代を逆手に取って、気候変動に耐えていける産業や新しいビジネスに取り組みようとしている。十勝・帯広は、その先駆けになれますね。  
**市長** 実は、以前、環境省で提唱されている地域の姿「地域循環共生圏」の構想図を見た時「これは十勝19市町村のことだろう」と思いました。個々のまちが自意識を持ちながら、近隣のまちとのネットワークのもと、圏域として共生している姿ですよ。  
**和田** そうです。地域循環共生圏は、役所目線ではなく、とにかく市民目線を徹底しています。自分たちの理想のまちはどうあるべきか、どう育てていくのかを当事者意識を持って考える。それを「オーナーシップ」と言っていますが、その「オーナーシップ」と「ネットワーク」、「サステナブル」、この三つを掛け算したまちをつくる

ことが大切だと思っています。「オーナーシップ」があるからそれぞれのまちが自立できる。でも、決して孤立しているわけではなく、周りのまちとも「ネットワーク」でつながっている。そうすると「サステナブル」つまり、個々のまちが共生しながら、循環型の持続可能な地域となっていく。これを地域として目指すことが、これからの時代、必要になるのではないかと考えています。  
**市長** 帯広のオーナーシップの象徴と言えるかもしれません。半世紀、50年も前に、百年の大計で「帯広の森」をつくり始めました。ウィーンの森のように、市民が自ら植樹して、育てた森でまちを囲むという、当時の市長の発想がとも面白く思っています。  
**和田** ええ、本当に面白いですね。  
**市長** それで、4期目の公約には、「森と公園に暮らすまち」を掲げました。次の50年の帯広の森の展望を、市民の皆さんと一緒に考え

## 森と公園に暮らすまち



たいなど。日高山脈襟裳国定公園の国立公園化の話もその考えに拍車をかけました。  
国立公園化が実現すると、帯広から日高山脈を遠くに見たときに、まちの方へ引いて見ると畑と帯広の森があり、もつと引いて見ると、広い緑ヶ丘公園がある。それも、ポツンとあるわけではなく、日高山脈の右にいくと大雪山国立公園があり、白糠丘陵があり、その奥には阿寒摩周国立公園がある。帯広空港に降り立ったら、少ない時間で、三つの国立公園にアクセスできてしまいます。多分、三つの国立公園に囲まれる空港は、帯広しかないのではと思うと、国立公園化は、十勝・帯広にとって、非常にインパクトがあるものと考えています。  
**和田** なるほど、気が付きませんでした。国立公園化が実現すると、「十勝」は国立公園に囲まれた地域になるんですね。広い範囲で見ると、他の地域にもあるかもしれないませんが、国内でこのスケール感ではあまりないと思います。国立公園があつて、地域に森があつて、暮らしに公園があつて、重層的になつている。これも、まちのブランドですよ。  
今は自然共生が企業ブランドになる時代です。自然や森と共生す



る仕組みをつくりあげて、それを守っていること自体がブランドになる。企業からすると十勝を通して、エネルギーや観光だけではなく、自然保全の観点からも、新しい提言が出てくるかもしれない。そういう意味でも、日本で最初にネイチャー・ポジティブ<sup>※1</sup>という大きな流れをつくれるのではないかと考えています。  
**市長** ありがとうございます。私も、ポジティブという単語は、まちづくりの考え方を説明する時によく使います。「ポジティブな考え方ができる人を増やそう」と。それを標語にしたのが「第七期総合計画」の目指すまちの姿「おおあお ひろびろ いきいき 未来を信じる帯広」なんです。  
**和田** はい。私たちの未来は、自分たちで挑戦して切り拓いていくのだと思います。第七期総合計画からも、そうしたオーナーシップを感じました。  
**市長** 先が見えない時代に、ネガティブなことを考え始めたら、いくらでもネガティブになつてしまいがちですが、そこをポジティブに捉えて、立ち上がり前を向く人がたくさんいるまちが、存在感のあるまちになつていくと思います。そうした人たちがまちづくりに参加してくれる企業を増やすことにも、しっかりと取り組んでいきたいと思っています。

る仕組みをつくりあげて、それを守っていること自体がブランドになる。企業からすると十勝を通して、エネルギーや観光だけではなく、自然保全の観点からも、新しい提言が出てくるかもしれない。そういう意味でも、日本で最初にネイチャー・ポジティブ<sup>※1</sup>という大きな流れをつくれるのではないかと考えています。  
**市長** ありがとうございます。私も、ポジティブという単語は、まちづくりの考え方を説明する時によく使います。「ポジティブな考え方ができる人を増やそう」と。それを標語にしたのが「第七期総合計画」の目指すまちの姿「おおあお ひろびろ いきいき 未来を信じる帯広」なんです。  
**和田** はい。私たちの未来は、自分たちで挑戦して切り拓いていくのだと思います。第七期総合計画からも、そうしたオーナーシップを感じました。  
**市長** 先が見えない時代に、ネガティブなことを考え始めたら、いくらでもネガティブになつてしまいがちですが、そこをポジティブに捉えて、立ち上がり前を向く人がたくさんいるまちが、存在感のあるまちになつていくと思います。そうした人たちがまちづくりに参加してくれる企業を増やすことにも、しっかりと取り組んでいきたいと思っています。

## 未来を考えてみる



なが楽しくて豊かで安心できて、こんな未来に住んでみたいと思うことを並べたら、自動的に17の目標が成り立っている。それだけのことだと思っています。  
**市長** 市民目線と言われたら、すーっと入ってきますね。  
**和田** はい。そう考えると、帯広市民の皆さんの目線で未来を考えてみる時の出発点は何だろうと。私は、「強み」から考えたら、面白いのではないかと考えています。まずは、「自然」という強み。次に、「農業」という産業。そしてもう一つは、「人」です。何か面白いと思うことがあつたら、チャレンジしてみようという人たち。閉鎖的ではない人たちです。  
自然というベースと、農業という歴史的な産業と、前向きな気風を持つ人との三つで未来像を考えて、この三つの貴重な資産を最大限活用するために、どんなエンジンで加速させていくのか。エンジンの一つとして、カーボンニュートラルに取り組みの面白いと思います。その結果、災害に強い、ライフスタイルが健康的、子育ても安心、エネルギーも自立して、極めつけはビジネスが盛ん。そんなまちになったら、ちよつとどころか、かなり楽しいまちになると思います。  
**市長** それで、先ほどの地域循環



共生圏につながるんですね。  
**和田** そうです。この三つの資産を活用しながら、市長が描いたビジョン、第七期総合計画をもとに市民の皆さんが面白いぞ、と思うものをみんなで描いてみる。その未来の絵を見たら、他の地域の人もみんな驚くのではないのでしょうか。  
**市長** ありがとうございます。お話を伺って、もつともつと頑張つていかねばと思えました。(笑)  
未来を考える時に、常日頃自分に戒めているのは、常に時間軸を持つことです。例えば、一足飛びに目標を達成できないとしたら、一番早く到達するためには、一見不合理に見えることでも、ここに石を置いた方がいいのではないかと。毎日そんなことを考えています。  
**和田** 私も、近視眼的でもなく、無責任に未来を考えるのでもなく、どちらも見ながら、自分ほどの布石を打てるのか考えています。その石は、蹴飛ばされたり、ブルドーザーで動かされたりするかもしれないませんが、これが常套手段だと思つて布石を打つことができるのが、国の役人の醍醐味だと思えます。でも、地方行政は一つの分野だけではなく、まちづくり全体を見て、市民の皆さんとコミュニケーションを取りながら石を置いていく。それも楽しいですよ。  
**市長** はい。これからも、市民の皆さんと一緒に、みんなが幸せになるまちづくりを目指したいと思っています。本日は長時間、本当にありがとうございます。  
**和田** とてもダイナミックなお話で、楽しかったです。こちらこそありがとうございます。

※1 ネイチャー・ポジティブ 生物多様性や自然の損失を食い止め、回復させ、豊かにすることを優先して企業活動などを進めていくこと。  
※2 SDGs (Sustainable Development Goals) 2030年までに持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の「持続可能な開発目標」の略。